



誰かがいる家

【難易度】：5

【期限】：平日5日（月曜～金曜）、1日1シーン。

【雰囲気】：幽霊屋敷×昭和レトロ×懐中電灯で探索

【トーン】：PG12

【状況】

目標：屋敷の噂についてまとめる。

3年生の高橋^{たかはし}加奈^{かな}の母方の伯父^{ふるみね}、古峰^{かすお}和夫が2か月ほど前に亡くなった。60歳代前半だった彼は、独身で子供もいなかったと、加奈は父から教えられた。加奈の母は既に病死していて、伯父と血縁があるのは、加奈と、叔母である古峰^{ふるみね}千里^{せんり}の2人だけだった。遺言により、七裡^{しちり}にある平屋の一軒家を加奈が、伯父が住んでいた隣の市のマンションを千里が相続することになった。

加奈が相続した家是不気味な感じがした。伯父もなぜかここには住まず、マンションに住んでいた。見に行ったところ、中にはほこりが積もり、ここ30年は誰も住んでいないようだ。当然、電気も水道も通じていない。しかし、窓辺に人影が見えた、物音が聞こえたなどの噂があった。

高橋家は家の中を整理するため手伝いを募集する。〔生徒〕もその手伝いに誘われる。手伝いをしつつ、家の中を調べて、噂の真相について調査し発表することが、〔生徒〕たちの目的だ。

【導入】が終われば、「♥A：玄関」に向かう。【場所】の山札から「A」を除いておこう。

【今いる場所】

学校の食堂。〔生徒〕は昼休みに集まって話をしている。そこに加奈がやってきて、【状況】について語り、整理の手伝いの話をもちかけてくる。〔生徒〕たちなら奇妙な噂がある家に興味を持つだろうと考えたからだ。

【問い】

〔生徒〕の中に彼女と特に関係があったり、彼女のこの事情について知っていたりする者はいるだろうか。また、いきさつを知ってどのように思っただろうか。それを語り合うこと。

♥【場所】

A：玄関

古い木製の下駄箱と、錆びついた鉄製の傘立てがある。色々な靴が並んでいるが、古いものではないので手伝いなどで来た人たちの靴だろう。ここから内履きに履き替えて中に入ったことがわかる。電気が通じてないからか、中は薄暗い。夕方なので、どんどん暗くなっていくだろう。〔生徒〕たちは懐中電灯を取り出し、家の中に入ろうとするが、そこに1人の人影が見える。

【演出】：玄関に入る時に何を感じたか。また、それを周りの人々に言うだろうか。

2：廊下

細く長い。床は古く、歩くたびにきしみ音を立てる。壁紙は色あせ、所々剥がれかけている部分から、下の古い塗装が覗いている。絵画や写真が飾られていて、かつての住人たちの歴史を感じさせる。

【演出】：廊下を調べ、この家の構造について新たな発見をする。例を挙げれば、どこかの部屋に出る隠し扉や、ある部屋とある部屋をつなぐ隠し通路、あるいは塗り込められた扉などだ。発見したのはどのようなことか。

3：ダイニングキッチン

目を引くのは大きな木製のテーブルで、その周りに年月を感じさせる椅子が4脚ある。かつては賑やかな食事の時間を過ごしていたのかもしれない。撤去されたのだろう、冷蔵庫や食材置き場の類は一切ない。シンクには水垢がこびりついている。棚の

中には、古いデザインの皿やコップが残っている。料理スペースにはさび付いた包丁や鍋、食事を作る時に聴いていたのであろう古いラジオがある。

【演出】：この家に住んでいた人々が、どんな人たちであったのかを推測する。これは理論的な推理である必要はなく、単なる感想や当て推量で構わない。

4：居間

色あせた絨毯が敷かれていて、埃に覆われた大きく古いソファがある。窓はカーテンで閉ざされ、光はわずかにしか入ってこない。ソファの正面には木製のテレビ台があり、上に何か置けるくらい分厚い年代物のテレビが鎮座している。テレビ台には、同じく年代物の機械がある。おそらくビデオデッキだ。横には3倍録画済みなどと書かれた、コミックスくらいの大きさの白い箱がいくつも置かれていて、それがビデオテープらしいと想像できた。時計もあるが、ある時刻を指したまま針は微動だにしない。

【演出】：動くはずがないと思っていた機器が突然、動き始める。それは何か。この部屋以外にある機器が動き出し、音が聞こえるというのでも構わない。

5：ベッドルーム

大きめの寝台が2つあり、埃が積もっている。かつては寝心地のいい寝台であっただろう。部屋の一角にはクローゼットがあり、もう一方には大きな姿見がある。大きな窓にはひどく色あせたカーテンがかかっている。寝台のそばに大きなベルのついたアナログ時計があるが、ある時刻を指した

まま針は微動だにしない。

【演出】：窓を開けると、何が見えるか。

6：書斎

家の奥に位置し、他の部屋とは異なる厳かな空気を纏っている。重厚な木製のドアを開けると、埃に交じって古い本の匂いが鼻をつく。本棚には、事典や辞書の数々、ハードカバーの小説、古い雑誌など様々な書籍が不規則に並べられている。書斎の奥には大きな机があり、散らかったままの筆記用具や、黄ばんだ紙の束が置かれている。机の上には卓上用の電灯がある。LEDや蛍光灯よりも古いタイプだ。机の引き出しを開けると、古い写真や手紙が無造作に放り込まれている。吟味して役に立つものを見つけるには時間がかかることだろう。

【演出】：興味深い読み物を見つける。〔生徒〕たちの前で起きた【現象】の1つについて記したものだ。本でもよいし、日記や手紙でもよい。それはどの【現象】について、なんと言及しているのか。

7：石膏像の部屋

部屋に入ると目に入るのは、それぞれ異なるポーズをとった人間大の石膏像が3体並んでいる光景だ。1体は手を広げて天を仰ぎ見、もう1体は内省的な表情で頭を垂れ、最後の1体は前方をただ見つめている。部屋の壁紙は淡い色で、部屋全体に穏やかな雰囲気を与えている。石膏像は細部のディテールが甘く、未完成のようだ。サインや制作年も見つからない。部屋の隅には小さな作業台があり、彫刻の道具が置かれている。

【演出】：石膏像を見ていた〔生徒〕たちは、1つの発見をする。それは何か。

8：花壇

昔、花壇だったと思しき場所を発見する。色とりどりの花々で飾られていたのであろうスペースは、野生の草花の海と化している。仕切りのレンガも、所々崩れ、土に埋もれかけている。

【演出】：荒れ果てているが、咲いている花もある。それはどのような花か。美しいだろうか、それとも不気味だろうか。

9：井戸

庭の一角には石造りの古い井戸がある。安全のためか、柵で囲われている。井戸は重い木の板で蓋がされている。井戸の横には、ポンプ式の井戸が設置されている。錆びてはいるものの、まだ使えなくもないようだ。かつては日々の生活に欠かせない存在だったに違いない。

【演出】：井戸のそばで【脇役】が何か気になることをやっている。それはどのような行動か。

10：屋根裏部屋

天井にある扉を発見した。近くにあった長い棒を使って扉を開けて降ろすとはしごになり、上がると屋根裏部屋があった。中にあったのは、さまざまな雑多なもの、そしていくつものシールが張られた大きなトランクケースだった。

【演出】：トランクケースを開けたあなた方は、その中に何を見つけたのか。

◆ 【現象】

A

- » どこからか聞こえる廊下を歩く音
- » 壁に映る影
- » 冷たい手の感触

2

- » 写真の人物が微妙に動いている
- » 何かを引きずるような音
- » 石膏像の表情が変わった気がする

3

- » 壁の中から叩くような音がする
- » つたい落ちる血
- » 急に落下する額縁

4

- » 天井から聞こえてくる足音
- » 窓の近くに人影
- » 急に消える懐中電灯

5

- » 湿った咳をするようになる
- » 水滴が落ちる音がずっとしている
- » 大きな音をたててしまい、【脇役】がやってくる。《夜遊び》中で、加奈の父が警察官が来た場合、自動的に【補導】の判定が発生する

6

- » 登場した【脇役】の心霊写真
- » 風のような、人の声のような音
- » 突然出てくる霧

7

- » 腐った床に足をとられる
- » 古いラジオが突然動き出し、怖ろし気な声我突然受信する。
- » 昨日、この家の中にいた夢を見た。そのことをみんなに言おう

8

- » 激しい頭痛
- » 受け取ったメールあるいはメッセージが文字化けしている
- » 調度品が突然倒れてくる。無作為に犠牲者を決定しよう。《挑戦》に失敗した場合、調度品がぶつかる。痛みでこの【シーン】では判定が【不利】になる

9

- » 撮影した写真に光の帯が写る
- » 壁に浮き出ている顔のような染み
- » 昨日、帰り道で誰かに後ろをつけられたような気がした。そのことをみんなに言おう

10

- » 人の写真を撮ると、その肩に誰のものか知れない手が乗っている
- » 隣の部屋から聞こえる囁き声
- » 危険なものを調べて怪我をしそうになる。無作為に犠牲者を決定しよう。《挑戦》に失敗した場合、怪我をする。痛みでこの【シーン】では判定が【不利】になる

♣ 【手がかり】

A

- » 古い日記
- » 錆びた包丁
- » 伯父と他数人が写った写真

2

- » 所見付きのレントゲン写真
- » 井戸で起きた事件についてまとめた古いノート
- » 切り取られた新聞記事

3

- » 壊れた時計
- » 遺言状の草稿
- » 血の付いた衣服

4

- » 白いケースに入った黒いビデオテープ
- » 古い手紙の束
- » 天井にある屋根裏部屋の扉を開けるのに使う棒

5

- » 石膏に押された指紋
- » 家の中に入り込んだユーチューバーの動画
- » 扉を塗り固めた痕跡

6

- » DNA鑑定書
- » ひびの入った石膏像
- » 家と土地の権利書

7

- » 持ち主の変遷について書かれた住宅履歴書
- » ある【脇役】を、以前この家の近くで見たという証言
- » 気になる足跡

8

- » 会話を録音したカセットテープ
- » この家の設計図
- » 血の付いた手袋

9

- » 戦前のこの区画の地図
- » 花壇の作り方について書いてある本
- » 家具の後ろに隠された血痕

10

- » 壊れた置き時計
- » 不動産の心理的瑕疵物件に関する事例集
- » 古いアルバム

♠ 【脇役】

A : 高橋 加奈

女性。同じ中学校の3年生。書道部。母は病死していて、今は父と2人暮らし。古峰和夫の姪で、不気味な平屋を相続した。成人するまでは、管理は父親が行うことになっている。

「手伝ってくれてありがとう、助かるね。あ、そうだ、懐中電灯持ってきて？」

「ちよつと気味が悪い家なのよ。あなた方はそういうの好きなんでしょ？」

2 : 高橋 智弘

加奈の父。40代中盤。会社員。古峰和夫とはほぼ付き合いがなかったため、相続については戸惑っている。金銭面で特に困っていないので、家の処遇については加奈の意思を尊重し、意見を聞きながらじっくり決めればよいと考えている。娘のため問題なく相続を進めようと、弁護士や不動産業者への依頼は、もう1人の相続人の古峰千里と共同で行った。

「加奈の友人たちかな？ 助かるよ」

「暗くなってきたら帰つかまわれないからね。事故でも起こったら大変だ」

3 : 古峰 千里

加奈の叔母。40代前半。服飾デザイナー。古峰和夫の妹。隣の市にあるマンションを相続した。彼がマンション以外に家を持っていたことを、初めて知った。価値ある家ではないかと気になっていたが、どうするにしても手間がかかりそうなので、マンションの方でよかったと考えている。隣県に住んでいるが、ウィークリーマンションを借りて来ている。

「兄さん、なんでこんな家を買ったのかしら……知り合いの家だったのかな」

「兄さんについてはあまり知らないのよ、透子姉さんの方が親しかったわ」

4 : 山田 利久

男性。40代中盤。不動産業者。加奈の父、高橋智弘と叔母の古峰千里の依頼で、家を調べている。改修か改築か解体、居住か賃貸か売却、様々な選択肢について調べ、顧客が最適な選択をできるように情報を提供するのが仕事だ。幽霊の噂があると、価値は下がりがちなので、そうした噂が広まることについて神経質だ。

「ふれあい不動産の山田利久と申します。よろしく願いいたします」

「この家、井戸があるんですよ、あれはちよつと厄介だね」

5 : 平林 容子

女性。40代前半。弁護士。加奈の父、高橋智弘と叔母の古峰千里の依頼で、相続手続きをサポートしている。相続争いが発生したなら、解決策の提案を行うことも仕事のうちだ。今回は、家財の確認に来た。後に財産が発見されると、税務上や遺産分割で問題が起きがちだからだ。

「価値がありそうなものがあつたら教えてください。あとで査定をしますのて」

「内縁関係の方がここに住んでいたなら……、相続権はないけど調べておくか」

いけだ たける
6: 池田 健

男性。同じ中学校の3年生。美術部。この家に石膏像があるという話を聞き、興味を引かれて手伝いに応募した。同じ文化系クラブで同学年ということで、加奈とはそこそこ親しい。

「この家、石膏像のある部屋があるんだよ。あの部屋、アトリエだったのかも」

「まあ、正直に言うと、あまりうまい作品とは言えないけどね」

こくほ なおき
7: 小久保 直樹

男性。20代中盤。交番勤務の警官。怖い話は好きだが、就職して廃墟侵入系の話は楽しめなくなってきた。この家で目撃された人影も、不法侵入者ではないかと考えている。真面目な警官なので、《夜遊び》中に会うと厄介なことになるだろう。

「ボランティアは良いことだけど、あまり遅くまで残っちゃダメだぜ」

「空き家に入り込んで騒ぐ連中がたまにいるから、ちよつと見に来たんだよ」

わたなべ えりい
8: 渡辺 恵里衣

女性。県立大学の学生。動画配信者。自分の名前のことは「Ellie」という。動画配信者としては、まだまだ人気は低い。許可が取れたら屋敷を撮影した動画を配信したいと考え、手伝いに応募した。

「迷惑系じゃないから！ 許可取れないうちに配信はしないよ！」

「取り壊すんじゃないければ、撮ってもあ蔵入りにする可能性が高いんだけどね」

おかの じゅんいち
9: 丘野 純一

男性。70代前半。ポメラニアンを連れて毎日散歩している。ポメラニアンも高齢で、抱いていることもよくある。散歩中、この家の中に人影が見えたと感じ、そのことが気になっている。好奇心から今回の手伝いに参加した。

「確かに誰があつたんじゃよ、この家の中にな。人影が見えたんじゃ」

「30年ほど前じゃったかな、この家に人が住んでいたのは」

たかはし とうこ
10: 高橋 透子

加奈の母。生きていれば40代後半。故人。3年ほど前に脳卒中で病死している。主婦だった。古峰和夫とは10歳以上年が離れている。趣味は読書と園芸。静かで内省的な性格で、花の世話をしている時と、自宅の書斎で過ごす時間を特に愛していた。彼女の話有谁かから聞いたり、彼女が書いた日記を読んだり、様々な形で登場しうる。

「庭のアジサイの花が咲いた。思った通りの色をしている。写真を撮ってあこう」

「兄さんへ。この度のことは大変ショックだったと思います。私もあの家には何度か……」